



浪江町請戸地区における場所の記憶の保存と活用に関する試論：被災地域におけるグリーフワークとしての1/500 復元模型を用いた着彩-対話型ワークショップの提案

楢橋, 修

友渕, 貴之

秋田, 遼介

(Citation)

神戸大学大学院工学研究科・システム情報学研究科紀要, 5:13-24

(Issue Date)

2013

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81005529>



浪江町請戸地区における場所の記憶の保存と活用に関する試論 被災地域におけるグリーフワークとしての1/500復元模型を用いた 着彩-対話型ワークショップの提案

楢橋 修^{1*}・友渕 貴之¹・秋田 遼介¹

¹工学研究科建築学専攻

(受付:April 19, 2013 受理:July 19, 2013 公開:September 25, 2013)

キーワード： 東北地方太平洋沖地震、復元模型、ワークショップ、グリーフワーク、記憶

東北地方太平洋沖地震にともなう大津波によって壊滅的な被害を受けた福島県浪江町請戸地区では、同時に発生した福島第一原発事故による避難区域に指定され、住民は県内外の各地に分散して避難生活を送っている。郷里に入ることも許されない中、被災前の生活空間についての記憶が次第に失われることは大変深刻である。筆者らは東北地方太平洋沖地震で住み慣れた街を喪失するという悲嘆体験に対するグリーフワーク(喪の作業)として、被災前の街や集落を縮尺1/500の白い模型で復元し、着彩と対話による市民とのワークショップを通して、そこに生活していた人々の記憶を収集・記録する方法を考案し、これまで岩手・宮城・福島各県の13の被災地において実践してきた。本試論では、浪江町請戸地区において行ったワークショップを通して参加者から得られた証言「つぶやき」の整理・分類を行い、貴重なオリジナルデータとして地域再生のために再活用する可能性について検討するとともに、人々の記憶によって再構築される請戸地区の生活空間の特性について考察を行った。

1.はじめに

福島県双葉郡浪江町の沿岸部に位置する請戸地区は2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震とそれに伴う大津波によって壊滅的な被害を受けた地域である。また同地区は福島第一原子力発電所より10km圏内に位置しているため、福島第一原子力発電所事故とその後の放射能漏れの影響によって避難区域に指定された。2013年4月現在、避難指示解除準備区域の指定を受けているが、復旧復興の目処が立たず、住民達は再び住み慣れた土地に戻ることが出来るのかどうかの展望も不透明なまま、県内県外において分散しての避難生活を余儀なくされている(Figures1と2)。

同地区をはじめとする福島県下の避難区域の住民は、震災及び原発事故から2年が経過し、この先も愛着のある土地から離れて避難生活を続けていかなければならないという状況にある。記憶の中の郷里の景観が、いつの日か帰還することを望む人々の拠り所であることは言うまでもないが、その記憶を維持していくことは決して容易なことではない。まして津波によって住宅や建物の大部分を失った請戸地区の人々にとって、避難生活の中で毎日郷里の記憶が失われていくという事態は大変深刻であり、事故発生時にとどまらず現在にいたるまで進行中の状況である。心身医学の分野では家族や知人の死、家屋や財産、アルバムや思い出の品などすべてを一度に失うという津波における複合的で同時多発的な喪失体験に対し、グリーフケアの重要性が注目されている^{注1)}。グリーフ(grief:悲嘆)とは大切な人やものを喪った時に生じる身体的・心理的・社会的反応を指し、その苦痛から回復するため「グリーフワーク(grief work)=喪の作業」が必要であるとさ

れる^{注2)}。被災した地域社会にとって、街や集落の空間を喪失することは「ふるさとを喪ってしまった」悲嘆体験として位置づけられる。特に帰還への展望が閉ざされたまま、分散しての避難生活を強いられている避難区域の住民にとって郷里の記憶を喪失することを食い止め、失われゆく郷里の空間の記憶をとりもどし、記録することは、生活再建や除染活動、復興計画の策定と並行して行われるべき急務の課題であり、建築学的な見地から貢献するべきグリーフワークに位置づけられるのではないかと考えた^{注3)}。

2.本稿の目的と方法

そこで縮尺1/500の集落の復元模型の制作と、それを活用した着彩-対話型ワークショップによって、山や海、地形などの自然風景、その中で社会が築き上げてきた街や集落の景観を再現し、ワークショップを通じて、人々の日々の生活や人々の繋がり、あるいは文化、慣習、伝統など、地域に暮らしてきた人々の記憶の風景を2m×3mの模型上に再構築する手法を提案する。縮尺模型は、集落を上空から俯瞰的に見たり、街路に立つ目線の高さまで覗き込んだりと、多視点かつ多様な距離から観察を行うことが可能であり、この白い模型の屋根や街路に着彩を施し、また自宅や記憶に残る場所に記憶内容を記した「旗」を立てる過程の中で、参加者の空間的な記憶が模型上の街に投影される。参加者は着彩や「旗」立てを案内する聞き手に対し、街の思い出を自発的に語り始める。そして復元模型を囲んで参加者が発した記憶の証言を「つぶやき」として採取する(Figure3)。そこで語られたより詳細かつ多様な街の記憶は、情景の描写であったり出来

事の記憶であったり、場所にまつわる物語であったり非常に多岐にわたるが、そのいずれもが参加者一人一人にとっての場所の記憶として大変貴重なオリジナルデータであり、場所に付与される豊かな属性を含んでいるものが多く見られた。

本稿ではこうした被災地における縮尺1/500の復元模型を用いた着彩-対話型ワークショップを被災した地域社会にとっての建築学的なグリーフワークのあり方として提案すると共に、参加者が語った「つぶやき」の詳細な分析を通して、オリジナルデータを地域再生のために再活用する可能性について検討するとともに人々の記憶によって再構築される生活空間の特性について考察を行うことを目的とする。

3. 既往研究・調査について

原発事故によって避難区域となった請戸地区を含む浪江町の震災時または避難生活における人々の体験や街の状況についての調査、報告としては、「まちづくり NPO 新町なみえ」および「3.11 実行委員会」による、震災発生時とその後の避難生活における個人個人の体験についてまとめた「東日本大震災 3.11 浪江町民避難の記録」や、福島県浪江町が浪江全町民に対して 2012 年、2013 年に行った被災・避難の状況や街の再建に関する意識についてのアンケートの結果報告などがある^{注4)}。これらは主に震災当時または震災後に関する住民の声を収集したものであり、今後の街の再建に関する住民の意識などについての記述は見られるものの、かつての街における生活や場所に關連する記憶についての言及は見られない。

また集落における空間構造や、その土地の生活者にとっての各場所・土地の役割と意味などに着目した先行研究としては、その集落圏内において生活者に日常的に使用されている「生活地名」を分析することにより、その地域における土地・空間に対する居住者集団に共通した意識を考察する山崎寿一、重村力らによる研究がある^{注5)}。集落内で用いられる言葉の中からその土地の空間構造を読み取るという点において重なる部分があるが、本研究が被災地で避難区域となった場所を対象にして行っている点、住民が語る言葉に制約を設げずに名称や体験にまつわる言葉、空間描写なども対象にし、日常的な生活空間の構造を読み取ろうとしている点において異なる。本研究は記憶という心的現象を対象にしていることもあり、山崎らの研究に比べて厳密性にかける部分があるが、より生活に密着した空間性を取り出すことができると考える。

また、人々の特定の場所に対する認識や愛着について顕在化し記述する調査方法として野田が確立した「写真投影法」(写真による環境世界の投影分析法)は地域空間の評価研究として広く用いられている^{注6)}。同手法は調査対象者に何らかの指示を与えるとともにカメラを渡し、一定の空間内において写真撮影を依頼し、その後、各写真における撮影時の心理状況についてヒヤリングを行うことを通し、個々人の心的境界及び記憶とその認知された環境との関係を顕在化するものである。具体例としては、いくつかの町における住環境への愛着の度合いとその理由について比較検討し、愛着の生まれやすい外部環境における要素の抽出を試みた湯瀬匠らによる「写真投影法を用いた住環境の「愛着」に関する研究」^{注7)}や、自身の所属大学に対する各学生の認識パターンとそれぞれの度合いについて、いくつかの大学における結果の比較検

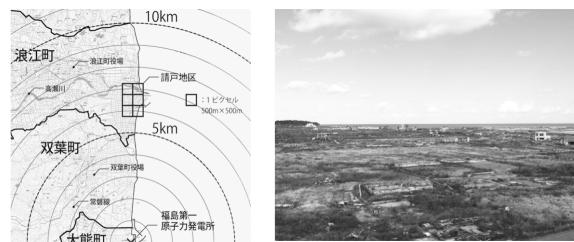


Fig.1 浪江町請戸地区

Fig.2 現在の請戸[2012.11.28]



Fig.3 二本松市で行ったワークショップの模様

討を行った岡本卓也らによる「写真投影法による所属大学の社会的アイデンティティの測定」^{注8)}等が上げられる。同手法は場所とその場所に対する人々の認識、記憶の記述を目的とする点で、本研究において採用した模型を活用した手法と多くの点で共通しているが、写真投影法は前提として対象となる街の中を実際に歩いて行わなければならず、視覚的情報を扱うことによる視覚的な景観の評価を行うという点において、本研究の模型上における記憶の抽出と異なる。目の前におかれた復元模型と自らの記憶の中にある空間とを関連づけることで、失われた街の情景を記憶から発掘・収集するのが本論における方法論的特徴である。

4. 浪江町・請戸地区について

研究対象地区となる浪江町請戸地区は、太平洋沿岸部に位置する人口1,620人（震災前）の集落であった。集落北部を流れる請戸川河口に位置する請戸港を中心とした漁業と、稲作等の農業が古くから共存する地帯であり、また安波祭りや田植踊など海と陸の文化が融合した固有の伝統が守られてきた地域である。福島県沿岸部の「浜通り地区」の中でも高低差がほとんどない平地に発展したため、今回の大津波によって、地区全域が壊滅的な被害を受けた。死者・行方不明者数も約120人と双葉郡で最も多い。請戸小学校などいくつかの建物を残し、現在ほとんど構造物は残っておらず、その土台を残すのみである。また冒頭で述べたように、同地区は福島第一原子力発電所事故の影響により、自由に立ち入ることは制限されており、住民達は未だ県内県外において離散した避難生活を余儀なくされている。

2013年2月22日から26日までの5日間、請戸地区より40kmほど内陸に位置する二本松市市民交流センターにて、「記憶の街ワークショップ for 浪江町」を開催した^{注9)}。生活空間をすべて喪失したのみならず、その土地の自然環境からも遠くはなれて、地域のコミュニティも離散せざるを得な

い環境で暮らす地区の人々にとって、地区を復元した模型を用いたワークショップに集まることは、喪失した故郷の思い出を語る機会になるだけでなく、地域で慣れ親しんだ隣人たちと旧交を深める機会にもなることが期待された (Figure4)。そこで「まちづくり NPO 新町なみえ」の協力のもと、ワークショップ開催期間中は請戸地区住民が多く暮らしている二本松市内、福島市内の仮設住宅3カ所（北幹線第一仮設住宅、南矢野目仮設住宅、笹谷仮設住宅）とワークショップ会場とを専用バスで送迎し、来場者数は5日間で請戸地区の震災後人口1458人の3割近い約450名を数えた。福島県内に在住している請戸地区の人口944人の約半数ということになる^{注10)}。開催期間を通して「旗」716本、「つぶやき」290件を得、住宅の屋根をはじめとして模型への着彩が施された^{注11)}。

5. 復元模型を用いたワークショップ手法

本稿で提案する被災地における縮尺1/500の復元模型を用いた着彩-対話型ワークショップの手法は、東日本大震災直後の2011年3月25日、全国の建築学生が模型制作という専門技能を活かして被災地に貢献できるグリーフワークの方法、そして広域に喪われた都市・集落空間を外部者が理解するための方法として構想した^{注12)}。同年6月～9月にかけて宮城県気仙沼市の各地において試験的なワークショップを行った後、同年11月、12月からの展覧会等の機会を活用して22の大学研究室、計500名以上の学生達が連携して制作に携わり、現在までに岩手、宮城、福島各県の被災地34地域の1/500復元模型を制作してきたプロジェクト^{注13)}^{注14)}の一環として位置づけている。現地での着彩-対話型ワークショップも順次開催しており、現時点で13カ所で開催している^{注15)}。また、被災地外の都市部において被災地理解を目的として開催した展覧会は全国各地で13回に及ぶ^{注16)}。新聞記事の掲載や報道番組での紹介など^{注17)}、このプロジェクトに対する社会的反響が大きいことより、この活動が被災地にとって必要とされており、グリーフワークとしての効果が期待されていることは確信できる。しかし、それが被災地域の社会にとってグリーフケアの効果や有効性がどのくらい認められるのかに関して、この試論で明らかにすることは難しい^{注18)}。ただし、この手法によって被災地住民達から語られる多くの記憶を詳細に整理・分析し復元模型上に形成される風景を位置づけることにより、グリーフワークとしての本手法の建築学的な意義について明確化できるのではないかと考えている。特に本稿においては参加者が語った「つぶやき」の詳細な分析によって、人々の記憶によって再構築される生活空間の特性を明らかにしたい。

本稿におけるワークショップの方法は以下の3つの段階に分けられる (Table1)。

- (1) 対象地域の白い「1/500復元模型」の制作
- (2) 復元模型を活用した「着彩-対話型ワークショップ」
- (3) 「1/500復元模型」上に集められた記憶の整理・分析

(1)は被災地の場所の記憶を効果的に誘起し、直接的に記録するための媒体の準備であり、航空写真や住宅地図などを参考にあらかじめ研究室で制作を行う。1/500は1つ1つの家屋を識別可能な程度にボリュームや屋根の形状等の作り込みを行える縮尺であり、出入り口や窓といった詳細まで再現する



Fig.4 模型制作範囲



Fig.5 請戸白模型



Fig.6 ヒヤリングの様子

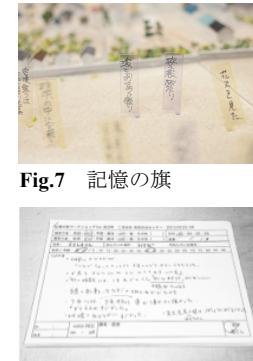


Fig.7 記憶の旗



Fig.9 WS後の模型

ことはできないが、家屋の規模感や隣地との関係などを表現することが可能である (Figure5)。

(2)は本研究における記憶の収集の主要な過程となる。ワークショップでは模型の観察及び着彩とともに、自宅や印象に残っている場所の名称やそこでの体験を、「旗」に記して模型上に立てる。この過程を通して、住民自らの記憶の中にある空間と模型上の空間との較正を促し、そこから想起し語られた、地図や航空写真からでは読み取れなかった樹木や鳥居、時計台などの景観、あるいはその街空間の中で証言者自身が体験した出来事、地域の行事、そしてまた被災当時の体験についてなど、住民達一人一人の持つかつての街の記憶を証言として「つぶやきシート」に記録を行う。本来、グリーフワークとして位置づけて進めているものであるので、事前に聞き手からの質問項目や形式などは設けない。また証言者も事前に指定せず、会場を訪れた不特定多数の請戸地区住民の方々を対象として証言の記録を行う^{注19)} (Figures6と7と8と9)。

(3)「つぶやきシート」に記録された住民達のかつての街に関する証言の中から、街空間に関連する証言内容を抽出し、復元模型上に再現される空間について分析を行い、街の空間構成と人々の記憶の中の場所性について考察を行う。

Table1に示した「(4)WS結果の再活用」に関しては、本稿では今後の課題となるが、本手法がグリーフワークとして機能する上で大変重要であり、着彩後の模型を展示するだけでなく、ワークショップの過程で得られた「旗」や「つぶやき」の情報を整理し、効果的な表現方法を考案することにより、今後長期間にわたって地域に必要とされるグリーフケアに活用していくことが可能になると考える。その意味でもワークショップによって得られた膨大で貴重な情報を計画学的手法を用いて整理・分類し、人々の記憶が再構築する生活風景として表現・伝達していくことの可能性について検討が必要である。

今回、請戸地区で行った5日間のワークショップは、隨時参加可能、自由閲覧形式を取り、またグリーフワークの観点から、例えば時間を区切って参加者に順番に各作業を行ってもらうような形式は取らず、「旗」の本数、「つぶやき」の数に上限を設げず、話したい人には話したいだけ話して頂く形式によって行われた。また模型展示会場には常時8名の聞き手が常駐し、来場者が少ない時には対話役と記録役の2名組で来場者に「自宅はどこですか」「思い出に残っている場所はありますか」といった簡単な質問から話しかけ、そこから始まる対話の中でヒアリングを行い、またその中で随時「旗」立てや「着彩」を促す形で本ワークショップは進行された。また来場者が混み合ってきた時には1対1で来場者につき、「着彩」「旗」立ての誘導と「つぶやきシート」の記録を同時に行つた。^{注20)}

6. 分析：記憶の「旗」と「つぶやき」

6.1 「旗」の分布傾向

住民によって語られたかつての街に関する個々の記憶の証言は、「旗」と「つぶやき」という2通りの方法により記録される。2m×3mの1/500復元模型を前にして、自宅や記憶に残る場所を直接指し示して語られる記憶を「旗」に記入して

Table.1 1/500復元模型および着彩-対話型 WS の構成

段階	作業	参加者	成果物	
(1) 1/500 復元模型 の制作	1-1 対象地資料整理	・模型制作参加者 (学生・教員等) ・実行委員会	・復元模型(白)	
	1-2 模型用地図作成			
	1-3 模型制作			
	1-4 梱包・発送			
(2) 着彩-対話型 WS	2-1 現地会場等手配・告知	・模型展示会 来場者 (対象地内外)	・着彩模型 ・旗情報 ・つぶやき情報 ・写真等	
	2-2 WS開始			
	展示ヒアリング	・WS実行スタッフ (学生・教員・他) ・実行委員会		
	データ整理			
(3) 記憶の 整理・分析	2-3 データまとめ	・参加学生 ・教員等 ・実行委員会		
	3-1 旗・つぶやき情報の電子化			
	3-2 旗情報の座標抽出			
	3-3 つぶやき情報の整理分類			
(4) WS結果の 再活用	3-4 着再模型の写真撮影・整理	・電子情報 ・空間情報整理 ・分類結果 ・WEBアプリケーション等		
	4-1 再活用の条件整理		・企画に準ずる	
	4-2 情報の表現方法設計			
	4-3 模型再展示企画			
	4-4 その他			

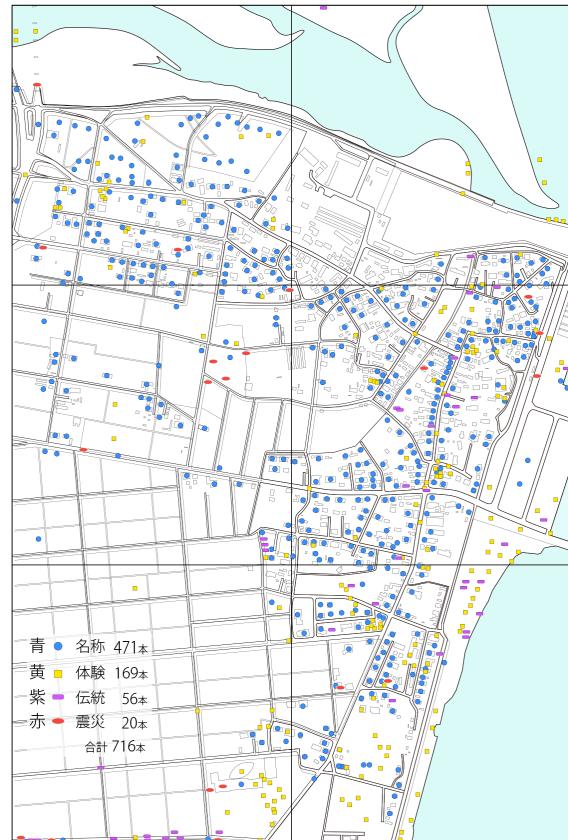


Fig.10 「旗」プロット図

模型上に立てる。それぞれの家や店の名称の他には「40年前は、漁港は白い砂浜だった」といった場所についての記憶や「海風が強くて、布団を午前中しか出せなかつた」といった描写が合計716本の「旗」に記入され立てられた。「旗」は記憶の内容に応じて「名称」「体験・出来事など」「伝統など」「震災時の記憶」に分類し、それぞれ青・黄・紫・赤の4色に分けて立てる。Figure10に全716本の旗の分布を示した。中でも「名称」の旗は471本と全体の66%にのぼり、大部分の住宅や建物に家主や建物の名称が記された。震災から2年が経過しても、住民たちの記憶の中に集落内の空間が詳細に息づいていたことが伺える。

6.2 「つぶやき」の構成

「旗」を立てていく過程は、住民の集落空間に対する記憶と模型上の空間との較正効果を生み、集落に関する歴史、行事など体系的だった街についての記憶や、より物語性のある個人的な体験談、また街に対する感情や思い等を呼びおこし活発な語りにつながる。こうした口述を「つぶやき」として専用のシートに記録し、5日間で計290件の「つぶやき」を得た^{注21)} (Figure11)。

「つぶやき」の採取にあたっては、縮尺模型を眺め記憶の中でかつての空間を想起しながら語られる言葉の群の中に集落のイメージがどのように再構築されるかを検証するため、特に質問形式を決めず、語られたことをシートに記録していくようにとめた。「つぶやき」は復元模型を眺めて「なつかしいねえ」といった単純な感想もあれば、震災時の避難の過程に関する詳細な語りや、亡くなった家族への思いなど、多岐にわたる。これらの「つぶやき」をすべての内容について精査し、特に「つぶやき」内に言及される場所の有無、場所の性質によって整理を行い、最終的に地点や領域として空間上に場所を特定できない「つぶやき」群Aと、場所の特定が可能な「つぶやき」群Bとに分類した。群Aと群Bは数にして126:155の割合となつた^{注22)} (Figure12)。

一方「つぶやき」の内容も「旗」同様にいくつかに分類することができる。ここでは「描写」「体験」「震災時の記憶」「感想」という4種類に分類し、A,B両群における「つぶやき」の内容の傾向を構成比で比較した。群Aにおいては「描写」「体験」「震災時の記憶」がほぼ同数であり、群Bにおいては「描写」に関するものが「体験」や「震災」に比べて多かった (Figure13)。群Aに含まれる全「つぶやき」126件をTable2に、群Bに含まれる全「つぶやき」155件をTable3にそれぞれ掲載した^{注23)}。

群Aの「つぶやき」を概観すると、「描写」に分類される「つぶやき」のうち半数以上にあたるものは請戸地区全体に関するもので、沿岸部ならではの潮風や砂とつき合って育まれた生活文化や、漁業にまつわる「つぶやき」が多く見られる。また「震災」に関する「つぶやき」の中には家族を喪った悲痛な「つぶやき」もあれば、仮設住宅での暮らしにおける請戸住民の結束の固さを主張するものもある。「仮設で引きこもってテレビを見ているだけではだめ。やっぱりこうやって外に出て人と話をしないといけない。」(番号110)や「やっぱり自分の家のあたりを見ると蘇るね」(番号125)といった様に、このワークショップへの参加を通して、自発的な回復への気持ちを表現する「つぶやき」も見られる^{注24)}。被災者ひとりひとりに対するグリーフケアとしての効果をここで論じるこ

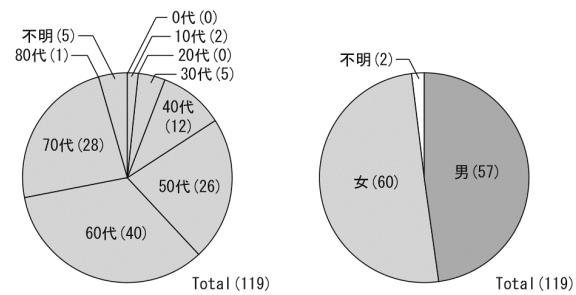


Fig.11 つぶやき証言者の年代／性別の割合

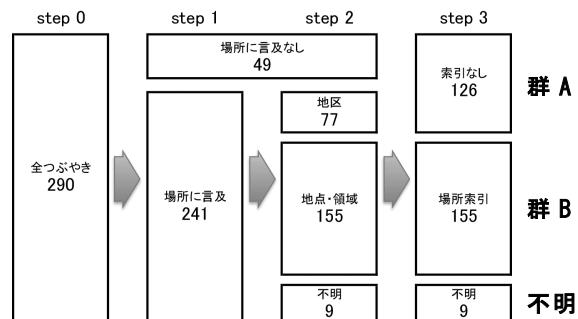


Fig.12 場所言及による「つぶやき」の分類

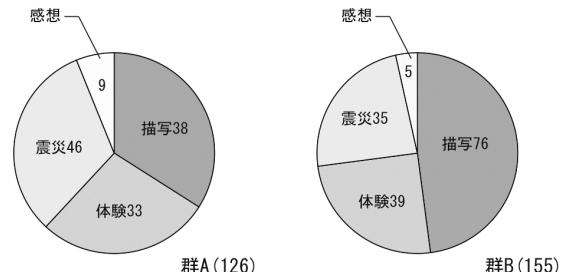


Fig.13 「つぶやき」内容による構成比

とはできないが、このワークショップで得られた「つぶやき」の一つ一つは請戸地区住民のコミュニティにとっての喪失に対し、地域が共有していた記憶を復元模型の上で表現し合い、その場で再会した人々によって共有されたことを示しており、この方法が災害に見舞われた地域におけるグリーフワークとして機能していることが確認できる。

6.3 「つぶやき」の場所索引に見る集落のイメージ

空間上に特定できる場所に言及している群Bの155件の「つぶやき」は、言い換えれば、<集落空間上に位置づけ可能な「つぶやき」>と考えることができる。すなわち、これらの「つぶやき」は、特定の場所が<索引>となって、「旗」と同様に空間上に位置づけることが可能である。そこで、群Bで言及される場所と抽出したところ、場所索引は73件になった (Table4)。場所索引には地点として一ヵ所特定できる場所と、「マリンパークあたり」や「お墓の近辺」といった様に領域を表すものもある。それらを区別しつつ、場所索引を地図に表したのがFigure14である。290件の「つぶやき」のうち、群Bに属する場所特定が可能な155件の「つぶやき」が言及した場所を空間的な広がりのなかで見てみると、請戸地区に備

Table.2 つぶやき群A [Total 126]

Table.3 つぶやき群B [Total 151]

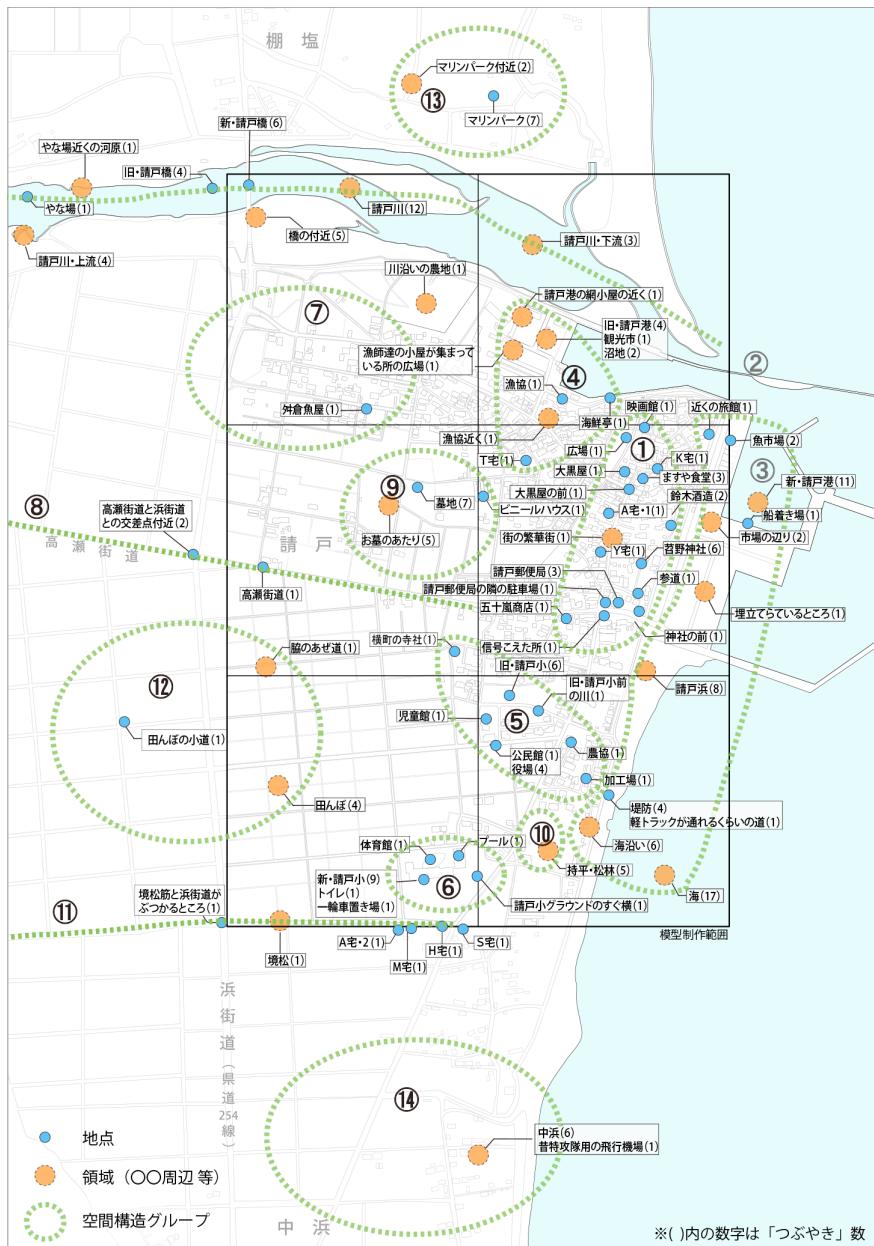


Fig.14 「つぶやき」群Aにおける場所索引の分布と地域の空間構造グループの抽出

Table.4 空間構造グループと場所索引一覧

番号	空間構造グループ	場所索引
①	中心部(17)	映画館 ますや食堂 大黒屋 大黒屋の前 街の繁華街 請戸郵便局 五十嵐商店 若野神社 神社の前 広場 歩道 信号を超えた所 鈴木酒造 請戸郵便局の隣の駐車場 Y宅 K宅 A宅・1
	② 請戸川(9)	請戸川 請戸川・上流 請戸川・下流 新・請戸橋 旧・請戸橋 橋の付近 やな場 やな場近くの河原 川沿いの農地
	③ 海岸(10)	海 新・請戸港 魚市場 船着き場 市場の辺り 埋め立てられているところ 請戸浜 埋防・軽トラックが通れるくらいの道 海沿い 近くの旅館
	④ 旧漁港(7)	旧・請戸港・観光市・沼地 請戸漁港の隣小屋の近く 漁協 漁師達の小屋が集まっているところ 漁協近く 海鮮亭 T宅
	⑤ 旧小学校(7)	旧・請戸小 児童館 公民館・役場 農協 旧・請戸小前の川 加工場 横町の神社
	⑥ 新小学校(4)	新・請戸小・トイレ・一輪車置き場 ブルー 体育館 請戸小グラウンドのすぐ横
	⑦ 新興住宅地区(1)	新・請戸小トイ 外倉魚屋
	⑧ 高瀬街道(2)	高瀬街道 高瀬街道と浜街道との交差点付近
	⑨ 墓(3)	墓地 お墓のあたり ビニールハウス
	⑩ 持平・松林(1)	持平・松林
	⑪ 境松(6)	境松 境松筋と浜街道がぶつかるところ A宅・2 M宅 S宅
	⑫ 田んぼ(3)	田んぼ 田んぼの小道 脇のあぜ道
	⑬ マリンパーク(2)	マリンパーク マリンパーク付近
	⑭ 中浜(1)	中浜・昔特攻隊用の飛行機場

※()内の数字は場所索引数

わり、住民が共有していた空間構造が見えてくる。Figure14ではそれらを14の空間構造グループとして記述している。住民たちの記憶から描かれる空間は集落の空間構造と豊かな情景を示している。

① 中心街：集落において最も日常的に人の集まる区域であり、13件の「つぶやき」では、各商店や映画館、郵便局、若野神社などの場所が登場し、そこで見られた生活の風景や、各場所が街の人々にとってどのような存在であったかについて語られている。

② 請戸川：集落北部を流れる請戸川、及び川にかかる請戸橋の一帯。請戸川に関しては主に鮭の遡上や放流、そして鮭を捕るために「やな場」など、鮭にまつわる言及が多く、震災時の体験の中で橋に触れたものが多い。

③ 海 岸：請戸港、請戸浜などを含む水際の区域であり、景観への愛着や、祭りの記憶などの言及から、請戸地区の人々にとって生活に密着した空間であったことがうかがえる。

④ 旧漁港：以前に請戸港があった場所は、「観光市」あるいは「タコ祭り」などのイベントにおける人々の賑わいが残り、魚釣りの場所であったことなどからも、依然として集落にとって重要な場所であったことが分かる。

⑤ 旧小学校：旧請戸小学校(1980年以前)、役場、児童館、農協を含む区域。集落にとって小学校の移転新設は大きな出来事であり、跡地(公民館)の思い出等も語られている。

⑥ 新小学校：1980年に新設された小学校及びその周辺の区域であり、体育館、一輪車置き場、トイレなどの学校内の各

施設についての言及を含め新しい学校が集落の新しいランドマークとして機能していたことがうかがえる。

⑦新興住宅地：「つぶやき」全体の中では比較的言及の少ない区域である。

⑧高瀬街道：浪江町の内陸へと続く道で集落を南北に分ける。「つぶやき」においては震災時の避難経路として語られている。

⑨墓：墓場は、「墓場の横の～」「墓場のそばは～」「お墓の前の～」など、周辺の空間的な基点・目印として複数の「つぶやき」の中で語れています。また震災に連なる「つぶやき」にも多く登場する。

⑩持平・松林：かつて住民によって松の小さな苗木を植えたエピソードや、漁師たちにとって海からの重要なランドマークだったことなどが語られています。

⑪境松：震災時の避難経路として登場しており、集落の南部の境界として植えられた松林。

⑫田んぼ：「つぶやき」においては、ここでかつて遊んだことの記憶や、田植え時期に発生する霧の風景について語られています。

⑬マリンパーク：祭りの練習や大学のサークル活動など、人々の多様な活動の場として多くの言及がある。またこの周辺の震災時の被害状況についても語られています。

⑭中浜：請戸地区の南に隣接する地区で、魚釣りや車の運転の練習、または子供の遊びなど、生活空間としては請戸地区と一体的であったことが語られています。

以上、場所索引によって空間を特定できる「つぶやき」群（B群）から見えてくる①から⑭のまとめは、請戸地区を構成していた空間構造と人々の記憶の中に息づいている場所の価値とを重ねて捉えることができる。太平洋に面し、また請戸川に面しているという地理的特徴をふまると、①～③、⑧については請戸の空間における主構造であると言える。④と⑤、⑥に関しては、近年移転が生じて新旧二つの場所を抱えたものである。港と小学校といった地域社会にとって存在感の強い場所であるため、記憶の証言も新旧とも場として機能していた。⑩、⑪といった防風林の存在と、⑬⑭のように請戸外の近隣の場所については、復元模型を前にしたことによって近隣との関係の中で請戸地域が存在していたことが意識され、言及された要素と言える。

このワークショップを通して得られた「つぶやき」から、集落内の場所に関する言及を抽出することで見いだされる集落空間は、可視的な景観構造のみならず、地域社会が育んできた様々な価値や物語で彩られており、人々の記憶によって再構築される生活空間を復元模型上に描き出すのである。その生活空間をこのワークショップの成果として記録し、場所索引を通して呼び出すことのできるアーカイブとすることは、この先、請戸地区の人々がこの地に戻って新しい生活環境を構築していく上で、大変貴重な空間資料となると考えられる。また、グリーフワークの観点からみても、ワークショップを行った際限のみならず、これから長く続く避難生活と復興へ向けた取り組みの中で、何度も立ち戻り地域の豊かな空間の記憶を取り戻す拠り所として機能していくことが期待されるが、その意味でも得られたオリジナルデータの整理・分類を通して建築計画学的な分析、モデル化の手法がデータの再活用に寄与していくものと考える。

7. まとめと課題

本稿では福島県浪江町請戸地区を対象として縮尺1/500の復元模型を用いた着彩-対話型ワークショップを行い、その成果の整理と分類を通して被災した地域社会にとっての建築学的なグリーフワークのあり方の提案と考察を行うと共に、この手法が外部者にとって地域理解のための有効な手段であることを示し、その上で参加者が語った「つぶやき」の詳細な分析から、人々の記憶によって再構築される生活空間の特性について考察を行った。以下に得られた知見と課題をまとめる。

[1]「つぶやき」の整理と「場所索引」の抽出

「つぶやき」を場所に関する言及の仕方により分類し、特定の場所について言及している155件の「つぶやき」を選び出した。それらの中で示されている場所を地図上に再配置し、それらが集落に暮らした人々の口述を空間的に位置づける「場所索引」として機能することを示し、73件の「場所索引」を抽出した。そして「場所索引」の分布から、集落内の空間構造を示すグループにまとめ、復元模型を前にした人々の語りから集落の主要な空間構造が描き出せることを示した。

[2]失われゆく生活空間の記憶の保存可能性

本研究の目的は、着彩-対話型ワークショップの建築学的なグリーフワーク手法としての提案を行うとともに、ワークショップを通して得られた生活空間における住民一人一人の記憶を「つぶやき」として保存し、オリジナルデータを地域再生のために再活用する可能性の検討を行い、それら人々の記憶によって再構築される生活空間の特性について考察することであった。

縮尺模型の前で住民たちが語るのは、発泡スチロール製の模型そのものへの言葉ではなく、大部分が住民それぞれの記憶の中にある場所に対する思い出や愛着であった。それは、震災から2年が経過して、慣れ親しんだ自然や集落の景観を全く奪われた状態で暮らしていても、集落の豊かな空間とそこに育まれてきた共同体にまつわる記憶は未だ失われていないことを意味する。しかし今後も帰還への展望が閉ざされたままで長く続く避難生活を考えると、一人一人の持つ郷里の記憶を如何に維持していくかという課題に早急に取り組まなければ、記憶は失われてしまうのみである。

[3]記憶データの精度についての課題

本稿における復元模型作成～着彩-対話型ワークショップが、地域が社会的に喪失した空間や環境に重点をおいたグリーフワークを前提としていたため、収集された生活空間の記憶という点でみると現時点において曖昧さや不確実さが含まれていることは否めない。また参加者の証言同士の間に生じる矛盾や、空間と関連しない情報の混在に関しても、科学性、再現性に乏しく、それらが客観的な生活空間の構造を導き出すに十分でない。一方で、白い復元模型をWS現地に持ち込んでヒアリングを開始すると参加者からしばしば模型の修正が要請され、その場で修正することが生じるが^{注25)}、この過程自体もグリーフワークという観点からみれば参加者が模型制作に参与するという意味のある過程と言える。地域の人々がこの先長い時間をかけて歩んでいかなければならぬ復興・再生への道程において、地域の悲嘆からの回復過程は何度にもわたる様々なグリーフワークを必要とする

だろう。今回得られた「つぶやき」はオリジナルデータとして大変貴重であるが、生活空間として計画学的にみた場合、有効な情報は部分的にとどまる。しかし、計画学的に分析・整理された結果を再活用していくことで、記憶の蓄積に空間的な秩序を与えていくことができると考える。

[4] 「旗」情報と「つぶやき」情報の統合

本稿においては着彩-対話型ワークショップで得られる「つぶやき」情報について重点的に分類と整理を行ったが、5日間の期間中に716本立てられた「旗」の情報は、このワークショップで得られる大変重要な記憶である。ワークショップ来場者の半数以上は「旗」は立てるが「つぶやき」を残していない^{注26)}。6.1で概要を示しているが、「旗」情報の特徴は、すべて場所が特定されているということである。模型上の「旗」に記載できる内容は名称や簡単な体験、描写等、「つぶやき」に比べて内容から文脈を読み取ることは難しい。しかし自分の家だけでなく、場所を指し示し「旗」を立てていく行為の集積は約450名の来場者が指し示した地点の総和として、その内容と共に意義深い情報である。これについては、本稿で「つぶやき」を分類した方法を適用することができないため、詳細な分析は別の機会で行うこととした。

[5] 生きられた空間の価値を継承していくために

本稿では「つぶやき」の中で明示的に場所を特定できる語りを対象にして、人々の記憶の中に息づく集落構造の描出を行ったが、今回詳細な検討からはずすことになった場所の特定ができない「つぶやき」の中にも、集落の時間・歴史に関するものや、集落への愛着の表現など、郷里の豊かな空間を想起させる語りは少なくない。そうした可視的でない様々な情報も含めて、記憶の風景はつくられていくものだと考える。生きられた空間としての街や集落は、そうした様々な土地への思いを集めることによって、次世代へ引き継いでいくことも可能になるのではないかと考える。その方法については今後の研究課題としたい。

〔謝辞〕 本研究活動は「神戸大学 平成24年度 東北大学などとの連携による震災復興支援・災害科学推進活動サポート経費」を受けて行われた事業「街の復元模型制作による、福島県浪江町の文化復興支援の取り組み」における支援事業として行ったものである。連携した東北大学工学研究科小野田泰明教授、並びに東北工業大学工学部建築学科講師の福屋粧子氏から活動に対する示唆を受けている。また現地での研究調査活動においては、「まちづくりNPO新町なみえ」及び「なみえ復興大学」の多大なる協力を得て進められたものであることをここに記し、御礼申し上げる。

注

- 参考文献4) p2.参考文献5)において村上は東日本大震災における同時多発的な喪失体験を1家族や友人、身近な人の死、2自身の健康、3家屋の崩壊、思い出の品などの物品、4仕事(自営業の場合は特に)、5経済的な負担、6地域のコミュニティ、馴れ親しんできた「街」、7安全感、信頼感、未来への希望と整理している。本稿で対象にするのは主として6と3にあたるが喪失体験は互いに連関しており、また1や2、4、5に関しては個人差が大きい。6に関しては地域に属する人々にとって喪失体験として共通性が高い。
- グリーフワーク(grief work)：「近しい人を亡くした人が、その悲嘆を乗り越えようとする心の努力。死別に伴う苦痛や環境変

化などを受け入れようとする。喪の仕事。」(三省堂 大辞林 第三版)。才藤(参考文献7))によれば「グリーフワーク」という用語を心理学における悲嘆研究ではじめて用いたのはエーリッヒ・リンデマン(Erich Lindemann,米国)であり、1944年米国ボストンで発災したココナツ・グローブ・ナイトクラブ火災事故で死亡した493人の家族らの悲嘆反応に関する研究が悲嘆研究の分野の基礎を作ったとして知られている。悲嘆反応がトラウマ反応と異なるのは喪失した人やモノにたいする分離不安であり、決して忘れない人、モノであるというアンビバレン特感情にある(村上：参考文献5)p378)。

3) 本研究における方法は、震災後人々が喪失した生活空間との分離不安を抱えており、復元模型の上で生活空間の記憶を取り戻し、位置づけることによって、同時にその喪失を受け入れる効果が期待できる(もちろん個人差はあるが)点において、グリーフワークとしてはたらき得るものであると考える。ただし、個別のグリーフケアその目的にしているものではなく、地域の人々が喪失を共有できる範囲における「喪の作業」に限定される。(WSから得られた「つぶやき」や参加者が語る言葉の中には、家族や知人との死別に関する言及も少なくないが、村上が述べる様に聞いて書き取るということに徹している。)

4) 参考文献8)参照。

5) 参考文献9)参照。

6) 参考文献10)参照。

7) 参考文献11)参照。

8) 参考文献12)参照。

9) 「記憶の街ワークショップ for 浪江町」

開催期間：2013.2.22～26／開催場所：二本松市市民交流センター2F会議室／共催：「失われた街」模型復元プロジェクト実行委員会、まちづくりNPO新町なみえ／企画：神戸大学榎橋修研究室／補助事業：街の復元模型制作による、福島県浪江町の文化復興支援の取り組み』(神戸大学 平成24年度 東北大学等との連携による震災復興支援・災害科学研究推進活動サポート経費[神戸大学／東北大学／東北工業大学])

10) 請戸地区震災前人口、震災後人口(H24.5.24現在)、避難先別人数については「浪江町の現状と課題」(浪江町役場発表資料、H24.6月)より。来場者約450名の内、一部、請戸地区外の参加者も含まれている。WS時点で正確な人数をカウントすることができなかつたが、ヒアリングを行ったスタッフの推測では2割に満たない程度であった。また来場者の重複は10名以下にとどまる。

11) 「着彩」及び「旗立て」における各参加人数であるが、第5章最終段落においても述べている通り本ワークショップは隨時参加可能、自由閲覧形式の下で行われたものであり、またグリーフワークの観点から一人あたりの「着彩」の回数や時間、「旗」の本数、「つぶやき」の数には限度を設げず、話したい人には話したいだけ話していただくというスタイルを取ったため、「着彩」「旗立て」における正確な参加人数は特定できない。しかし「旗立て」においてはその716本という本数と約450名の参加者数から鑑みて、参加者の内の大部分が行ったものと思われる。一方「着彩」は、一度の「旗立て」と比較して、時間と手間がかかるため、「着彩」に関わった参加者は「旗立て」「つぶやき」を行った参加者よりも少数であったと推察される。

12) 「失われた街」模型復元プロジェクトとして2011年3月より活動を継続している。当初より、建築学生のボランティア活動、街への追悼として1/500の白い復元模型の制作を位置づけ、現地での住民参加ワークショップによって着彩とヒアリングを行う想定で進めていた。http://www.losthomes.jp、参考文献1),2)

13) 「失われた街」模型復元プロジェクト模型制作参加大学研究室[22大学、25研究室]：(順不同)宮城大学中田研究室、大阪大学有志、愛知淑徳大学有志、茨城大学寺内研究室、京都工芸織維大学仲・城戸崎研究室、京都造形芸術大学中村研究室、国士館大学南研究室、昭和女子大学杉浦研究室、神戸大学近藤研究室、神戸大学榎橋研究室、神奈川大学曾我部研究室、早稲田大学古谷研究室、大阪

- 工業大学前田研究室,大阪市立大学宮本研究室,東京理科大学安原研究室,東京理科大学岩岡研究室,東北工業大学福屋研究室,東洋大学工藤・藤村研究室,日本大学佐藤研究室,日本大学山中研究室,武庫川女子大学有志,法政大学渡辺,名古屋市立大学久野研究室,名古屋工業大学北川研究室,立命館大学宗本研究室,横浜市立大学鈴木研究室
- 14) 1/500 復元模型制作地域(2013年5月現在、34地域、総計[142]内はピクセル数) : (岩手県) 野田[1], 田野畑[4], 田老[6], 女遊戸[6], 重茂[6], 山田[12], 大槌[9], 根浜[4], 釜石[1], 唐丹[6], 崎浜[6], 大船渡[1], 陸前高田[1](宮城県) 唐桑・大沢[6], 鹿折-□[6], 鹿折-□[1], 気仙沼・内湾[2], 気仙沼・南町[1], 弁天町[1], 南気仙沼駅周辺[1], 大島[12], 階上・岩井崎[2], 本吉・大谷[4], 小泉[12], 志津川[1], 長清水[6], 女川[1], 石巻[1], 萩浜・小積浜[12], 鮎川浜[1], 荒浜[1](福島県) 相馬港[1], 浪江・権現堂地区[1], 浪江・賀戸地区[6]。*下線は着彩-対話型ワークショップ開催済み。
- 15) 「記憶の街ワークショップ」(着彩-対話型ワークショップ)は、2011年6月に「南気仙沼駅周辺」の白い復元模型を気仙沼市役所のロビーに展示した日から、それを見た市民の要望に応える形ではじまり、以降回を重ねる毎に、方法の改善を進めてきた。本稿で扱っている方式は2012年9月に気仙沼市で行った「記憶の街ワークショップ in 気仙沼・内湾」(共催:「失われた街」模型復元プロジェクト実行委員会、エルメス財団)において定式化し、現在も活用している。本稿執筆時点(H25.5月)では、岩手県沿岸の被災地10地域を対象にした連続ワークショップを進めており、H25年度中に7カ所のワークショップを行う予定になっている。
- 16) 「失われた街」模型復元プロジェクトが主催、参加出品した展覧会(2013年5月現在、13カ所): 1)『311 失われた街』展(参加出品, 2011.11.02 - 12.24, TOTO ギャラリー・間), 2)『失われた街 -三陸に生きた集落-』展(主催, 2011.12.13-1.15, 東京都現代美術館), 3)『1.17.3.11 明日への建築』展(参加出品, 2012.2.18-3.12, ASJ UMEDA CELL), 4)『失われた街: 3.11 のための鎮魂の復元模型 14』展(主催, 2012.3.17-4.7, 名古屋市立大学千種キャンパス), 5)『3.11 -東日本大震災の直後、建築家はどう対応したか(海外巡回展)』(参加出品, 2012.3.6-, 巡回中, 国際交流基金), 6)『『つくることが生きること』東日本大震災復興支援プロジェクト展』(参加出品, 2012.3.11-3.25, アーツ千代田3331), 7)『失われた街 3.11 のための模型復元プロジェクト展』(主催, 2012.6.30-7.15, 兵庫県立美術館), 8)『失われた街 3.11 のための模型復元プロジェクト展』(共催, 2012.8.31-9.9, ヨコハマ都市創造センター), 9)『記憶の街ワークショップ in 気仙沼・内湾』(共催, 2012.9.22-9.30, 気仙沼市役所ワンテン庁舎2F), 10)『失われた街 3.11 のための「記憶の模型」展』(共催, 2012.11.29-12.19, 神奈川県建築安全協会 安協サービスセンター2F), 11)『東日本大震災復興支援「つくることが生きること」神戸展』(参加出品, 2013.1.17-1.27, デザイン・クリエイティブセンター神戸), 12)『“ふるさとの記憶”-いわて 失われた街 模型復元プロジェクト展 (山田町)』(共催, 2013.4.13-4.21, 山田町中央コミュニティセンター2F集会室), 13)『“ふるさとの記憶”-いわて 失われた街 模型復元プロジェクト展 (宮古市田老地区)』(共催, 2013.5.11-5.19, 宮古市田老公民館)
- 17) 2013年5月現在、「失われた街」模型復元プロジェクトおよび派生した復興支援活動が復元模型と共に37回新聞記事として掲載され、テレビの報道番組にて11回放送されている。主なものとして、日本経済新聞全国版文化面「忘れないためのアート」(2012年1月21日), NHKスペシャル「シリーズ東日本大震災 ふるさとの記憶をつなぐ」(2013年4月26日初回放送)など。
- 18) 心身医学における「グリーフケア」は、主に家族や知人と死別した個人の悲嘆体験から個人がどのように回復していくかをケアするものであり、本稿におけるワークショップがどの程度個人のグリーフケアに効果を発揮するかについてを実証

する調査は行っていない。ワークショップから得られた「つぶやき」の証言を見ていると、参加者の中には本人のグリーフケアに繋がったことを感じさせる証言がいくつか見ることができる。

- 19) ワークショップ初日から日を追う毎に白い模型は着彩が進み「旗」が立ちはじめ、初日の時点では地域のことについて知識が少なかった実行スタッフ達も参加者と話すうちに地域空間の様々な情報を身につけるため、「旗」の立ち方や「つぶやき」の発言・書き取り内容も日を追う毎に精緻に充実したものとなっていく。その上、人間の記憶は正確なものとは言い難い。よって参加者から等しい条件で証言を引き出していく訳ではないため、WSで集めたデータから直接的に客観的な事実を導き出すことは困難である。なお「つぶやきシート」では日付、聞取者、書取者、参加者氏名、住まい、性別、年代、つぶやき内容といった書き込み項目を設定している。
- 20) 今回制作した模型は6ピクセル(2m×3m)であったため、模型の周りに立てる人数は最大で20名程度のため、参加者6名が同時に模型を囲む程度であれば実行スタッフはインタビュア係と記録係の2名がつくことができるが、7名以上になってしまった場合は適宜、1名で兼務の体制に移行していく。
- 21) 5日間での来場者数約450名のうち、119名の住民より「つぶやき」を得た。同一人物の「つぶやき」であっても異なる内容が語られているものに関しては別の「つぶやき」としてカウントし、結果、証言数は290件となった。
- 22) 「旗」立てと「つぶやき」のヒアリングの過程で、場所に言及されていたものの、場所が特定できないもの(例「近所」、「家には井戸があって・・・」など)が9件あった。今後はヒアリング方法において、場所に関わる「つぶやき」はあらかじめ場所を特定できる仕組みに改善していく。
- 23) 表2、表3に掲載した「つぶやき」は、商店の屋号等で公開されていない個人名をイニシャルに変更し(6件)、特定の人物、団体の不利益にあたる恐れのある内容を一部削除した他は(1件)、すべて聞き取った原文のままである。
- 24) 参考文献6)よりグリーフケアのポイント要約。
- 1 悲嘆の反応は個人差がある; 家族の中でも違いがあり、「こうあるべき」という正しい反応はない。
 - 2 遺族の「語り(ナラティブ)」の尊重; まず「共感を持つて傾聴する」ことが第一歩。
 - 3 抑圧された悲嘆にはふみこまない; 遺族が冷静に淡々とふるまっているなどの場合は、感覚純磨におちいっている可能性もあり、それはその人なりの自己防衛反応である。その際は感情表出を無理に促そうとはしない方がよい。
 - 4 そっと「寄り添う」こと; 無理に言葉をかけようとはせず、そっと寄り添い、必要な時に手をさしのべるようなサポートの姿勢が大切である。
 - 5 相手のニーズに合わせせる; 遺族が必要としているのが精神的なサポートとは限らない。
 - 6 スピリチュアルな苦痛を理解する; 「なぜ亡くならねばならなかったのか?」という問い合わせに、究極の所、答はない。こうした問い合わせはスピリチュアルな苦痛の表出で無理に答えようとはしなくてよい。
 - 7 ケアする側(ケアギバー)の限界を知る; 複雑化した悲嘆(後述)のリスクが高い人など、その場で解決しようとはせず、必要な場合は適切な専門家につなげる。
- 25) 2013年3月に開催した岩手県山田町でのワークショップでは、津波で子をなくした母親が、子供部屋のあった建物の形状を正確に再現することを希望し、それをスタッフが修正して実現した。報道などを通して本プロジェクトが知られる様になるにつれ、模型の訂正自体もワークショップのプログラムとして認知されはじめている。
- 26) 私たちとしてはなるべく多くの人々に話しかけ、また参加者に話すきっかけを与える様に心がけているが、一度に大勢の

来場者が来た場合等は対応しきれない事態がピーク時に発生するが、今後の改善課題としたい。

References

- 1) Tsukihashi.O "A scale model for recovery, Model + Aid, (Toward a New Cityscape, 50 Projects by Young Architects)" (in Japanese), JA82, pp. 20-21, (2011)
- 2) Tsukihashi.O "A scale model for recovery, "Model + Aid," Memory of Kesennuma is restored in three dimensions" (in Japanese), Kenchiku Journal, no.1185, pp. 13, (2011)
- 3) Tsukihashi.O "Recovery and Revitalization for the Communities Suffered from the East Japan Earthquake and Tsunami disaster. -Through the Trial of Workshop with the Reconstruction Models in Kesennuma City—" Journal of Disaster Recovery and Revitalization No.2, pp.1-8, (2012)
- 4) Takaki.Y "Loss experience and Grief—Words of 34 mothers who lost the child through death by the Kobe earthquake—" (in Japanese) Igaku-Shoin (2007)
- 5) Murakami.N "Holistic Care for Loss and Grief Resulting from Disasters" Assistance Programs of the Great East Japan Earthquake vol.52, No.5, pp. 373-380, (2012)
- 6) Japanese "DMORT" study group "Family (bereaved family) support manual (the Great East Japan Earthquake version) -
- 7) Saito.C "Toward Pastoral Care for Grievers Who Seek Reconstruction of Meaning—A Review Paper on the Recent Studies in Bereavement in the United States and Europe—" Journal of Niijima Gakuen Junior College 26th, pp.29-41, (2006)
- 8) "Great East Japan Earthquake 3.11 Record of the Namie townsman refuge" (in Japanese), Machidukuri NPO Shinmachinamis 3.11 executive committee, (2012.3)
- 9) Yamazaki.J, Shigemura.T " Spatial Mental Image of Nakakubo Hamlet by Using Spatial Features in Naming Places—Spatial structure of cooperativeness—" Journal of Architecture, Planning and Environmental engineering, Transactions AJ, No. 451, (1993)
- 10) Noda.M "The children bleached—To the city reflected in their eyes" (in Japanese), Joho Center Publishing, (1988)
- 11) Uchida.M, Majikina.T, Yuze.T "A study on "the attachment" for living environment using projection images by photography : Part 1, A definition of exterior space and the result of simple totaling" Summaries of Technical Papers of Annual Meeting(2005)
- 12) Hayashi.Y, Okamoto.T, Fujihara.T "Measurement of place attachment using the photo projective Method," Kwansei Gakuin University Institute for Advanced Social Research(2008)

AN ESSAY ON RESTORING AND USING MEMORIES OF PLACE IN UKEDO AREA IN NAMIE- A Proposal of Making/Painting/ 1/500 Scale Model Restoration Workshop for Devastated Area As a Grief Work

Tsukihashi OSAMU¹, Takanori TOMOBUCHI¹, Ryosuke AKITA¹,

¹Graduate School of Engineering, Department of Architecture

Key words: The Great East Japan Earthquake, Restoration Model, Workshop, Grief Work, Memory,

Ukedo area in Namie, Fukushima, which was devastated by tsunamis of the Great East Japan Earthquake, has been designated as the evacuation area for Fukushima Daiichi nuclear disaster; while inhabitants are living in the refuges out of their hometown. While residents cannot go into their hometown, it is a very serious problem that the memory about a life space before suffering a calamity is lost gradually by them. As grief work for sorrow experience of losing the town to which it got used by the Great East Japan Earthquake, our project restored the towns and villages before suffering a calamity by the white 1/500 scale models, let the workshop of interviewing the locals and painting it, devised the method of collecting and recording memory of people who were living there, and have so far practiced in the stricken areas of 13 of Iwate, Miyagi, and Fukushima each prefecture. In this paper, we arranged and classified the testimony obtained from the participant through the workshop which was performed in the Ukedo area in Namie, and while examining a possibility of having realized them to be precious original data and re-utilizing for local revitalization, we considered the characteristic of a life space in the Ukedo area reconstructed by people's memories.